

黙示録13章16－17節 「神の印、獣の刻印」

1A 獣の像

1B 皇帝礼拝

2B 経済活動

2A 自分に与えられた印

1B 神の所有

2B 罪に対する悲しみ

3A 神からの自由

1B 不義の奴隷

2B 世との滅び

本文

黙示録 13 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、黙示録 13 章に入っています。今日の午後礼拝で一節ずつ見ていきますが、今朝は 16-17 節に注目します。「¹⁶ また獣は、すべての者に、すなわち、小さい者にも大きい者にも、富んでいる者にも貧しい者にも、自由人にも奴隷にも、その右の手あるいは額に刻印を受けさせた。¹⁷ また、その刻印を持っている者以外は、だれも物を売り買いできないようにした。刻印とは、あの獣の名、またはその名が表す数字である。」

とても有名な箇所です。最後のところに、獣の数字が六百六十六だということで、様々な推測があります。昔は、バーコードが獣の刻印だと言っていました。その後、体内チップだと言っていました。そして、最近、ワクチン証明書だという意見もあるそうです。しかし、大事なのは何をもって獣の数字なのか？ではありません。なぜ刻印を押されているのか、その理由や目的のほうがるかに重要です。今朝は、獣の刻印にある背景、そして目的を見ていきたいと思います。

1A 獣の像

この刻印の目的というのは、結論から言いますと、ひとえに「忠誠」です。神のものとなれ、神のしもべとして、神に仕えるのか？それとも、反キリストのものとなり、その奴隷となって、これに仕えるのか？という違いです。

これが、経済活動と関わっているのであれば、なおさらのことです。本文には、「¹⁷ また、その刻印を持っている者以外は、だれも物を売り買いできないようにした。」とあります。売り買いできないということは、神をあがめ、イエスを主とする者たちにとっては、実に大きな試練です。日ごろ、自分はイエスを主としていると言っても、自分の生活がかかってくる時に、はたして自分はどこに忠誠があるのかが、試されます。

1B 皇帝礼拝

この黙示録 13 章、私たちにとって将来の出来事だという読み方を、私たちはしています。けれども、この啓示の朗読を聞いていたのは、ローマ時代のアジア地方にある七つの教会の人たちでした。ですから、彼らがそれを聞いて、どのように思うのか？ということを考えるといいです。

私たちがトルコに聖地旅行に行った時、いくつもの遺跡を見ました。アゴラと呼ばれる、市場とも訳せるところがあります。あるいは広場とも訳せます。使徒の働きにも出てきます。いろいろな集会をする場所であり、また、物の売り買いをする市場です。

エペソの町に行った時に、そのアゴラの手前に、大きな門の遺跡がありました。凱旋門のようなものです。その門柱のところに、窪みの跡があります。ニッチと呼びます。彫刻など、置物を置く時に必要な窪みです。祠のようなものを、岩をくりぬいて窪みを付けて、彫像を安置します。

ローマには、皇帝礼拝がありました。ローマは当時の全世界です。地中海周辺の全域を支配していました。いろいろな国々、いろいろな民族の人たちが、その支配下に入りました。そこで、ローマをローマたらしめる、統合する象徴が必要です。いろいろな宗教をそれぞれの民族や国々は持っていますから、何か統合する象徴を持たないと、ばらばら分解してしまうのです。それで、新たに皇帝礼拝を始めました。皇帝が神の子であり、救い主であり、主です。..そう、キリストにつけられた呼び名は、皇帝に使われていたのです。皇帝こそが主であるというのを拒んで、イエスが主であるという告白を、キリスト者は行うのです。

ところで、異教の教えでは、何か悪いことが起こると、それは神々にきちんと仕えていなかったからだとして、それで祈ったり、賽銭を投げたり、礼拝行為をしますね。日本ではこれを、「ばち」と呼びますね。あらゆる供養が、そうした考えに基づいています。ですから、何か災いが起こるたびに、キリスト者に疑いがかかるのです。きちんと神々に仕えていないから、ローマに災いが来た。それはキリスト者たちのせいだ、となるのです。

2B 経済活動

その皇帝の像が、門の窪みのところにあって、それでアゴラに入ろうとする人々は、そこに焼香をたきます。そして、みな焼香をしているか監視している祭司がいます。他の宗教の人たちは、いろいろな神を信じている、多神教ですから、そこに皇帝がくわえられることぐらい、何の事ないです。しかし、イエスが主であると告白する者たちにとっては、勇気ある決断が必要です。キリスト者は、そっとその像の前を通り過ぎます。

ところが、その祭司が叫ぶのです。そのクリスチャンが市場に入ったら、「こいつは、皇帝をあがめなかった！」と大声で言いふらすのです。そのことによって、売り買いができないのです。市場で

すから、そこで店を開いて売っている人もいます。また買い物に来た人もいます。けれども、これらのことができなくなるということです。

ワクチン証明がもし獣の刻印であれば、拒んだ人たちが、売り買いできなくなってしまうでしょうか？いえ、違いますね。そのような形、つまり体内に何かを入れるというのが、意義ではないのです。自分がどこに忠誠を誓っているかが試される、リトマス紙です。

では、次はいかがでしょうか？日本の方々に伝道すると、イエス様を信じる人々は、比較的多くいます。イエスの教え、この方のなされたこと、そのすべてに同意し、納得して、信じたいと思う人は多くいます。けれども、その後には後ずさりする人たちがあまりにもいます。それは、「うちの宗教は、仏教だから」というものです。イエスを主として生き、イエスの名によるバプテスマを受ける時に、自分は仏教のしきたりにある、自分が家に属しているという所属意識を捨てて、キリストのものとなり、また教会、キリストのからだの一部になっていると決めないといけません。知的な理解以上に、自分はどこに忠誠を誓っているのか？が問われるのです。

私たちが、どこに忠誠を誓っているのか、自分が誰のものになっているかを知るのは、こうした、生活がかかっていることが分かってくる時に、現れてくるのです。それまでは、自分がイエスを信じていると思っています。けれども、いざという時に、本当にそうなのだと分かるのです。自分自身の経済的必要なことは、自分の核の部分に関わります。イエス様が、「あなたの宝のあるところ、そこにあなたの心もあるのです。」と言われました(マタイ 6:21)。

献金というのも、そうかもしれませんが、それよりも、キリスト者としての生活を全うしようとすると、生活の保障について、信仰を働かせないといけません。必ずしも日曜日がいつも休みというわけではないし、自分の生活のことだけを考えたら、いろいろもつともな理由がありますから、礼拝を献げないでいることが、あまりにも簡単なのです。身体を持ってきて、主を礼拝するところに、犠牲がともないます。しかし、そこで、自分がだれに属しているかが、明らかになります。

2A 自分に与えられた印

1B 神の所有

ところで、私たちは刻印について、すでに 7 章で学びました。神の印が額に押されている、十四万四千人のイスラエル人です。神のしもべです。神の名が押されているというところ、もはや、自分は自分のものではない、すでに神のものだという関係があります。神の所有となったのです。

「名」というのは、聖書の中で、とても大事なものとなっています。主が、天地を造られた時に、それぞれに名をつけられました。そして、アダムを主が造られて、彼に、動物などに名をつける仕事を与えました。そして、名は、それぞれの人生やその特徴を予め示すような預言的なものが多い

です。ヤコブが、かかとをつかむなど。主ご自身が、ご自分の名の栄光を、モーセに後ろ姿でお店になりました。主の本質そのものを示すからです。

そして、名が書に記されているということも、とても大切です。今もそうですが、当時はなおのこと、名が登録されていることで、自分がどこに属しているかを示していました。ダビデが人口を数えなさいと言われた時に、それで神から罰を受けましたが、それは自分の所有に、イスラエルの民をしたかったからです。神に属する者たちを、自分のものにしようとしたのです。そして、モーセがイスラエルのために執り成す時、自分の名を主の書物から除いてくださいと願いました。また、イエスは、弟子たちが悪霊追い出しから戻ってきた時に、自分の名が天に書き記されていることを喜びなさい、と言われました。どこに自分が属しているのか、自分はだれの所有なのかを示すのです。それに対して、獣の刻印を受けるとするのは、獣の所有になるということです。

そして私たちは、聖霊によって証印を押されました。「エペ 4:30 神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。」ですから、私たちのからだは、すでに私たちのものではないのです。主が、キリストの流された血によって、私たちを買い取ってくださったのです。「Ⅱコリ 6:19-20 あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。」

2B 罪に対する悲しみ

そして、神の御霊が与えられている人は、その御霊によって、罪に対して悲しみを抱きます。主ご自身の聖霊が、私たちのうちで悲しんでおられるからです。神のしるしについて、エゼキエル書において、神殿での偶像礼拝をしている者たちが大勢いる中で、額にしるしが神から置かれている人々は、その惨状に悲しんでいました。正しい心が、罪に対して悲しむんですね。そして、神にしるしを押された人々は、災いから免れました。

3A 神からの自由

1B 不義の奴隷

これが、獣の刻印の背景にあるものです。主のものとして、獣の像を拝むのを拒めば、売り買いができません。自分が死ぬことも覚悟しないとはいけません。では、そういったことから自由になろうとしたら、どうでしょうか？ 獣の所有となるのです。神の所有になって、獣による支配から自由にされるか、獣の所有となって、苦しみや殉教を免れるのか、ということのどちらかなのです。

パウロが、ロマ 6 章でこのことを語りました。「6:16-18 あなたがたは知らないのですか。あなたがたが自分自身を奴隷として獻げて服従すれば、その服従する相手の奴隷となるのです。つまり、

罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至ります。17 神に感謝します。あなたがたは、かつては罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規範に心から服従し、18 罪から解放されて、義の奴隷となりました。」

ボブ・デュランという、非常に著名なロック・ミュージシャンがいます。彼は、ユダヤ人ですが、ある時にイエスを自分の主として信じました。そして、Gotta Serve Somebody という歌を作ります。

でも あんたは誰かに仕えなきゃならないんだ ほんとだよ
誰かに仕えなきゃならないんだ
それは悪魔かもしれないし 神様かもしれない
でも 誰かに仕えなきゃならないってのは ほんとのことなんだ¹

彼は、ロマ 6 章のことを思っていた事でしょう。神から自由になりたいと思ったら、本当の意味で自由になることはないのです。私たちは、自立した中立な存在にはなりえないのです。自分が神から自由になったら、罪に仕えていることとなります。悪魔に仕えていることとなります。その逆に、罪や悪魔から自由になりたいければ、神に仕えるのです。

2B 世との滅び

そして、獣の刻印が押されたら、どうなるのか？一時的に、自分は守られていると思うでしょう。けれども、主が獣の国に対して、厳しい裁きを行います。16 章を見れば、これまでにない究極の、神の御怒りです。このようにして、この世とともに滅びるのです。自分自身は大丈夫だと思うかもしれませんが、世と世の欲は過ぎ去ると、第一ヨハネに書いてあります。自分が世のものとなっていれば、自分自身も世と共に滅びるのです。

終わりの日に、バビロンという大きな都が現れます。そして、それが一日のうちに滅びることが、黙示録 18 章で預言されています。天から、このような声が聞こえます。「18:4 それから私は、天からもう一つの声がこう言うのを聞いた。「わたしの民は、この女の罪に関わらないように、その災害に巻き込まれないように、彼女のところから出て行きなさい。」バビロンが滅びる時に、その災いに巻き込まれないように、出ていきなさいと命じられています。

もちろん主は、私たちをご自分のものとしているならば、世の滅びから救われます。しかし、その前に、懲らしめがあります。自分が世と共に滅ぼされることがないように、罪の中にいる者は、御霊によって惨めな思いにさせます。教会から一時、出て行かないといけないかもしれません。けれども、それは罪から離れて、救われるためです。「I コリ 11:31-32 しかし、もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません。私たちがさばかれるとすれば、それは、この世とともに

¹ <https://blog.goo.ne.jp/musicwatch/e/00faa42436c80fdc41cd5a37a0826e8d>

にさばきを下さることがないように、主によって懲らしめられる、ということなのです。」